



平城宮式鬼瓦の復元

蹲踞する鬼神が浮き彫りで表現されたこの鬼瓦(平城宮式I式A)は、平城宮造営当初より用いられたものです。現在までに150点弱が出土し、平城宮跡ではもっとも多く出土する型式ですが、そのほとんどは破片で、完形資料は少し表面が磨滅した1点しかありません。復元された朱雀門や第一次大極殿の屋根をも護るこの鬼瓦ですが、このたびの第一次大極殿院南門の復元にあたっては、情報量の多い完形品のみでなく、表面が磨滅していない状態の良い破片資料をピックアップし、表現の再検討を試みました。

すると、①鬼神の空豆形の目にうっすらと瞳、②上唇上方中央には人中、③手首には手くるぶしが表現されていたことがわかりました。また、膝に置いた手の五本の指は、もともとほっそりと長く表現されていることも判明しました。打ち欠かれていることが多い下部の文様も完全に復元し、下辺中央の半円形抉りを切り取るための目印の段差も復元しました。破片資料の情報を集めることによって、完形品を補って余りある表現を再現することができました。

朱雀門の復元から20余年。第一次大極殿院南門では、より奈良時代の姿に近づいた鬼瓦がその屋根を護ります。

(都城発掘調査部 岩戸 晶子)



上方から見たI式A(上のものは別個体)に表現されている瞳と人中



平城宮第一次大極殿院南門所用 鬼瓦の復元品